

適正施設ガイドライン

【レッサーパンダ *Ailurus fulgens*】

2020年10月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

1-1 獣舎

基本的に寝室（1-3に詳細記載）、屋外放飼場、室内展示場、予備寝室、予備放飼場が必要である。作業の利便性や繁殖時の対応、脱出などに注意した構造とする。ジステンパー感染を予防するため、獣舎は他の肉食獣の獣舎から20m以上は離れていることが望ましい。また、レッサーパンダの安静を脅かすような大型肉食獣の施設からは、50mは離れた方がよい。

新規でレッサーパンダの飼育を開始する際、ペアで導入してその後の出産も考えると、以下の施設の広さが最低基準と考えられる。

- ・ 放飼場 2か所
約70㎡が1か所（2頭以上で展示する場所）
約22㎡が1か所（1頭ないし2頭で展示する場所）
- ・ 寝室 4部屋（多ければ多いほど良い）
約4㎡が1か所（出産時期、子育て時期の母親用に使用する）
約3㎡が3か所（オスメスを分ける部屋）
- ・ エアコン
- ・ 竹庫

1) 屋外放飼場

レッサーパンダが立体的な利用ができるように、樹木や遊び木をいれる。樹木は日よけになる種類を植栽する。放飼場の方角は、放飼場を乾燥させるためや、動物に日光を当てるために東、または南向きが望ましい。雨や日射を避けるために東屋を設置する。日射避けは樹木を多く植えることでも対応できる。地面は土がむき出しだと土の汚れが体につくので、芝や草で覆うことが望ましい。排水をしっかりとること。

1頭ないし2頭で放飼する場合は、最低でも22㎡、できれば40㎡程度欲しい。放飼場が狭いと闘争の際の逃げ場が無い。1つの屋外放飼場の面積が狭い場合、数か所の屋外放飼場を渡橋などでつなげている事例がある。繁殖を計画的に進める場合は、オスとメスを分けて飼育したい時に放飼場が1つだと管理が難しいため複数あることが望ましい。予備放飼場があれば足りる。

2) 室内展示場

レッサーパンダは暑さに弱く、5月～9月の気温が高い時は、屋外放飼場では熱中症などになる事がある。気温が25℃以上の時には冷房をする必要がある。また、-5℃以下の極端な寒さや、雨や雪で体が濡れて冷えると体温が低下するため、強雨や降雪、積雪の時など、屋外に展示しない方が良い。さらに、屋外放飼場への積雪、凍結などにより脱走の恐れもある。荒天や酷暑でも常時展示できるように、エアコンを備えた、ガラスやアクリルで仕切られた室内展示場が必要である。

室内展示場にも樹木、休憩台などをいれる。室内の高さは3m程度欲しい。1頭ないし2頭で放飼する場合は、最低でも22㎡、できれば40㎡程度欲しい。1つの室内展示場の面積が狭い場合、数か所の室内展示場を渡橋などでつなげている事例がある。ガラス面の反射を考慮し、観覧通路は屋根があることが望ましい。床はコンクリートなどで清掃がしっかりでき、排水が早く速やかに乾燥するものであること。屋外放飼場との間のドアは開閉ができ、室内と屋外放飼場をつなげて出入りが自由にできる構造とする。

3) 予備放飼場

寝室とセットになった予備放飼場があると、さまざまなアクシデントに柔軟に対応でき、展示しない個体も健康に飼育できる。数は多くある方が望ましい。成獣のメス、2才

未満の子は複数で同居できるが、2才以上のオス同士は基本的に同居できない。これら同居のできない個体の飼育や、繁殖制限をするとき等に予備放飼場が必要である。

展示に用いないために周囲は金網になることが多いが、園内に侵入した野生動物等との接触を避けるために、観覧面以外は50cm以上の間隔を取った2重柵にすることが望ましい。広さは、最低でも22㎡程度は欲しい。

1-2 動物柵

金網や格子柵に必要な強度（鉄、ステンレスの場合）は、力はあまり強くないのでイヌなどを飼育する強度で十分である。格子線の太さは、直径3mm程度、金網の太さは直径3mm程度、金網や格子の目の隙間は2cm以下とする。天井に金網が無い場合には、上部は幅80cm以上のしび返しにしてアクリルなどで覆い、レッサーパンダの手がかからないようにする。

観客との間に遮蔽物が無く、観察しやすいモート方式は、幅1.5m以上、深さ1.5m以上が必要である。壁は登れないように垂直にする。コンクリート壁を造る際にできる型枠の穴に爪をかけて脱走する可能性があるため、穴は塞いでおくべきである。また、壁のコンクリート間の目地がはがれたところに手をかけて登るので毎日確認すること。さらに、化粧壁などにすると脱出の手がかりになるので、表面に凹凸の無い素材で作る。レッサーパンダがモートに落ちることもあるので注意する。

モート式に比べて無駄な面積が無く、傾斜地の場合には作りやすいピット式は、深さは1.5m以上が必要である。壁は登れないように垂直にする。ピット壁の下は湿気が抜けなため、レッサーパンダが長く滞在しないように放飼場に日陰や東屋を用意する。

1-3 寝室

寝室は夜間に休む部屋であり、出産用の部屋ともなる。繁殖した時を考えると広さより数を優先する。レッサーパンダは一度繁殖すると毎年繁殖する可能性が高いので、寝室の数は可能な限り多いほうがよい。最低でも導入時の頭数の2倍は欲しい。広さは、少なくとも一部屋は子育て用に4㎡程度、その他は3㎡程度欲しい。

キーパー通路側の仕切りは、レッサーパンダが登ってきたときに腹部の観察ができるので格子や金網のほうが良い。隣室とは見合いができる格子と、遮断できる鉄板が併設された遠隔操作のできるドアがあると使いやすい。寝室に必要な構造は次のものがある。

1) 休憩台

レッサーパンダは、休憩する時には、木の上などの高い所に登って休む事を好むため、木の代わりとなる物を設置する。角材を用いてスノコ状の休憩台を高さ1m程度の場所に設置する。足を挟む事があるため、角材の隙間は2cm以下が良い。サイズは30×60cm程度が必要である。複数の個体を同居飼育する時は、各個体が別々に休めるように複数の台を設置する。

2) 動物用はしご

休憩台に上がる時には、はしごや板が必要である。はしごは幅が20~30cm、間隔は15~20cm位が良い。板は設置角度を45度以下にし、幅は25cm位あると良い。自然の木を丸太のまま使用しても良いが、木肌がスベスベしている物や材質が硬い物は適さない。金網の場合は爪を引っ掛けたり、隣の部屋にオス同士を収容する場合等に指を噛まれたりする危険性があるので、登り用のはしごなどが必要である。

3) 寝室間の出入り口と仕切り

隣り合う寝室には個体の移動や見合いなどのために出入り口を設けることが望ましい。出入り口は格子や金網で隣が見える場合と、鉄板などで完全にふさが隣が見えないように交換ができるものが便利である。境の格子や網にアクリル板や、1cm角程度の金

網を取り付け、指などが出ないようにする。また、仕切り下部の下から 1m 位をアクリル板等で覆うと闘争によるケガを未然に防ぐ事ができる。

4) 動物用出入り口

動物用通路（シュート）で寝室や放飼場などの各区画がつながっていると、個体を寝室や展示場などの別の区画に移動する場合に簡単である。特に毎日使う屋外放飼場、室内展示場にはどの寝室からも移動できる構造が望ましい。また、移動用出入り口は個体と接触せずに遠隔操作のできる 40cm 四方程度のドアが必要である。地下シュートは幅 1m、高さ 1m 程度ある方が中に入って清掃しやすい。空中回廊はレッサーパンダが通るには 40cm 四方あればよい。動物出口が垂直ゲートの場合には、カウンターウエイト方式が開閉容易である。展示場への行き来に空中回廊を用いる場合は、来園者の手が届かない 2.5m 程度の高さが安全である。

5) 給水施設

寝室、屋外放飼場、室内展示場ともに給水施設を用意し一日中、常に飲めるようにしておく。また、冬季の凍結に注意する。毎日水を変える必要があるため、床を濡らさずに交換できる容器を使用したほうが良い。容器は、金属製や陶器等でひっくり返されないよう背の低い安定した形状の物が良い。容量は、1 頭につき 500ml 程度入る物を用いる。設置場所は地面に直接置いて問題ない。出産後は、子の成長につれ母親の飲水量も増加するので、容器を大きいものにするか、数を増やすなどの対応が必要である。

6) 巣箱

出産や休息用の寝床として必要である。出産時には普段から使い慣れた巣箱をそのまま利用する。レッサーパンダは育児中に箱内を清潔に保つために、子を連れて箱を移動するので、スペースがあれば複数の箱を用意するのが望ましい。

7) 体重計

常設ではなく持ち運び式のベビー用体重計等を用いて、定期的に体重測定を行なうことで健康管理に役立つ。重心の低い安定した物を使用し、餌を食べさせながら体重計の上に誘導して計測する。

1-4 設備

1) 竹保管庫

主食である竹は、その状態によって嗜好性が左右されるので、鮮度を保つ適切な保管が必要である。竹の入手頻度にもよるが、竹を長期に保存するために専用の空調室か冷蔵庫があるとよい。冷蔵する時の温度は 10~20℃であるが、エアコン使用の場合には乾燥しすぎるので、水を散布したりビニールなどで被い保湿したりする必要がある。冷蔵庫に保存しても 1 週間もすると葉の質が劣化したり落葉したりするので、週に 2 回以上の入手が望ましい。冷蔵庫が無い場合には通風の無い部屋に置き、水を散布するとある程度保持できる。

冷蔵庫の有無に関わらずバケツなどに水を入れて竹をつけておくと長持ちするが、水が腐敗すると竹も腐敗し、ぬめりが出るので水をこまめに入れ替える。

2) 防疫施設

レッサーパンダはイヌジステンパーをはじめ、感染症に弱い。そのために舎内に入る際には、踏み込み消毒槽を用いた履物の消毒や、舎内専用の履物に履き替える必要がある。また、定期的に室内も消毒すると良い。

踏み込み消毒槽では、塩素系の消毒薬を使うことが多い。寝室、放飼場の散布用には、逆性石けん製剤や次亜塩素酸系製剤を使用する。散布は園芸用のじょうろで充分であり、

散布後は十分に水洗する。

室内の消毒には、塩素系のパコマ、アンテック、ビルコンSなどの薬剤を使用する。散布は園芸用のじょうろで充分で、散布後は十分に水洗する。

3) 空調

レッサーパンダは、本来の生息環境から考えても、寒さには強く、通常は個体そのものへの暖房はあまり必要とはしないが、氷点下にはならないほうが良い。適温は5℃から25℃を保持することが望ましい。室温、気温は28℃までが上限である。

冷房は、レッサーパンダは暑さに弱いので必須である。最高気温が28℃以上になる地域では特に注意が必要である。冷房器具についてはエアコンで行なうのが一般的である。エアコンの風が直接動物に当たらないようにする。屋外に放飼するときにも、暑いときには部屋に入られるように、室内展示場にも冷房設備は必要である。屋外放飼場にスポットで冷房している例もある。夏季（5月～8月）に屋外放飼場に展示する際は、日射病、熱射病になることがあるので展示中の変化に注意が必要である。夕方の収容後も室温を考慮して冷房をする必要がある。闘争時など激しく動いたときには体温が上がり過ぎることがあるので、冷房で対応する。

暖房は、最低気温が氷点下にならない地域では普段は必要が無いが、病気などの時には必要になるので設置したほうがよい。暖房はエアコン、赤外線、赤外線ヒーター、フロアヒーター、パネルヒーターなどが使われており、これらを使用する場合には火災や火傷に注意する。屋外に放飼するときにも、寒いときには部屋に入られるように、室内展示場にも暖房設備は必要である。0℃以下になると鼻汁の排出や倦怠感などが現れることがあるので、室内温度0℃以上は確保する。

また、健康管理のため、床が濡れた状態で飼育してはいけない。湿度が高い地域では除湿機やエアコンで湿度の調節も必要となる。

4) 日除け

日射病予防のため、屋外にはよしずを張ったり、東屋を設置したりするなどして、必ず日陰を用意する。水の噴霧。地面に芝等の植物を植栽する。冷房のある寝室や室内展示場とのに出入りを自由にする。

5) 防虫対策

電子式防虫器を使用したり、窓を網戸にしたりする等して、衛生害虫や、フィラリアの感染源である蚊をなるべく避ける必要がある。

1-5 脱出防止対策

新規に獣舎を作り、放飼する場合などは、思いもよらぬ隙間や壁の引っかかりを登ってから脱出することがあるので、あらかじめ念入りに脱出の可能性がある場所が無いかわかる必要がある。レッサーパンダの脱出を防ぐには少なくとも、隙間は2cm以下、跳躍対策に幅2m高さ1.5m、壁の傾斜90度（コンクリート斜面）、扉が必要である。

過去の脱出事例では、爪を掛けて登る、ジャンプ、放飼場内の植栽と放飼場外から伸びた枝の接触による脱出、枝からの落下、立ち入り業者への注意事項の説明不足から起こったものがあった。また、身軽な幼齢個体や好奇心が他個体より強い個体が脱走したという報告もあるので、そのような個体を放飼場へ出す場合は、特に注意したい。獣舎の新築や改修の際は、これらの事例を念頭に置いて作る必要がある。